

「モンスターペアレント!? 親バカとバカ親は紙一重」

(諸富祥彦先生著・アспект) より抜粋

- 保護者会やPTAなどの集まりのあとに、「ちょっとお茶でも飲んでいかない？」と親御さんたちは連れだってファミリーレストランに入ります。…ファミリーレストランにはドリンクバーがあります。…ぺちゃくちゃおしゃべりしているうちに、だんだん盛り上がってきます。最初はお互いの子どもの話をしているうちに、2杯目の途中くらいになると、子どもの話も尽きてくる。すると、始まるのです。「そういえば、今度の担任、どう思う?」「ちょっと、さえないね」「うん、さえない、確実にさえない」みんな、うん、うんとうなずきます。「はっきり言って、辞めてほしくない?」「辞めてほしいよね」「うん、ほしい、ほしい」このあたりになると全員、興奮してきて身を乗り出し、声も大きくなる。「じゃあさ、辞めさせちゃわない?」「え、そんなことできるの?」「よくわかんないけど、きっとできると思うよ」「そうか…そうね、子どもたちのためだもんね」「そうそう、みんなでがんばろうよ」集団意識というのでしょうか。一人ひとりさほど問題にしていなかった場合でも、みんなで話をしていくうちに「教師についての重大な問題」がファミレスで“生産”されるのです。まさにドリンク・バーこそ教師の敵!! 単なる親御さんどうしのおしゃべりが、“緊急保護者会”へと発展していくのです。…教師退治の会議は、家に帰っても続きます。今度はメール会議です。…子どものいじめについてもメールは問題になっていますが、メールでは相手の顔が見えないぶん、直接会って話すときより感情的になって、発言がどんどん過激になります。…こうして、茶のみ話の延長で「そういえば」から始まった話が、いつのまにか“担任おろし”になってきます。実際、メーリングリストを使っての会議の結果を持って、数人の親御さんが校長室を訪れ、「〇〇先生を担任からおろしてください」と申し入れてきた小学校はいくつも存在するのです。

- 日本経済の狂乱の時代、バブル景気は1989年ごろから弾けだし、崩壊が決定的になり深刻な社会問題ととらえられ始めたのが、1993年と言われます。私が見るところ、学校の子どもたち、その親たちが変化し始めたのもそのころからです。…それまでは、多くの親たちにとって学校は、どこか「子どもを人質にとられている」ような感じのする、敷居の高い場所でした。たとえば子どもが悪さをして教師から呼ばれても「すみませんでした。以後、こんなことがないよう、子どもに厳しく言って聞かせます。こら、マサル、おまえも先生に謝りなさい!!」というのがあたりまえでした。…それが1995年あたりを境に、親御さんも教師に立ち向かい、言うべきことを言うようになってきました。…教師や学校が垣根の低い存在になってきたことじたいは、とても望ましいことだと私は思います。しかし、そうした流れの中で、「ウチの子が悪さしたのは、あんたたちの態度が悪いからだ。あんたたちが謝れ」という親御さんも出てきてしまいました。…教師や学校には、どんどんイチャモンをつけていい。「私たちは教育サービスの消費者、つまり客なのだから、文句を言って、注文をつけて当然だ…」という風潮が、親御さんのあいだに急速に広がってきつつありました。…そしていま、親御さんのモンスター化は速度が増し、その内容もますます過激になっています。…最近のクレームは、教師や学校への単なるイチャモンだったり、よしんば親心からくるものであっても、クレームのつけ方が激しく、重く、しつこい。

よく、百貨店などに執拗にクレームをつけ、それが営業妨害にまでなってしまう悪質なクレマーの話を書きますが、学校で起きていることも同じです。

- かつて、教師にとって子どもの親は、子どもの教育に関わって協力態勢を敷く“よきパートナー”でした。そうした関係に支えられて、教師の側にも、教師としての自信が育まれていたように思います。それは、親御さんと教師のどちらが上か、下かということではなく、教育のプロとしての自信です。ところが、いまやそうした関係性を支えてきた“教師の権威”そのものが失墜してしまいました。むしろ、親や子どもが教師をコントロールするようになってしまったのです。…親が教師に言いたいことも言えずにいたかつての状況に比べれば、学校が親達にとって、ものを言いやすい場所になったことじたいはいいことだと私は思います。しかし、…「ものを言いやすい」と「言いたい放題」は違います。
- 多くの教師はいま、たいへん厳しい状態に置かれています。その教師を、クレームなどでさらに追い詰めていくのは得策ではありません。両者が対等に話せるようになったいまだからこそ、親御さんが教師と手を結んでいただきたいと思います。教師を支え、バックアップすることで、お子さんのいる学校をよくしていこうというスタンスをとっていただきたいのです。そうすれば、教師も心にゆとりをとり戻して、子どもの教育という本来の仕事に専念できるようになるでしょう。
- 私がコミュニケーションにおける“三種の神器”と呼んでいるのが、「ごめんね」「おねがい」「ありがとう」の3つの言葉です。この3語がたくさん出る家庭がいい（ぜひ、紙に書いてリビングにでも張っておきましょう）。子どもに対して非があれば「ごめんなさい」。何かしてほしいことがあれば「お願いね」。何かしてくれたら「ありがとう」。あたりまえのようですが、家族だからこそ、この3つの言葉を夫婦間、親子間で交わすのは、なかなかむずかしいものです。支配的な親御さんになると、子どもさんに対してこの3語をまったく使わないのではないのでしょうか。まずは、夫婦のあいだで、意識してこの3語を使ってください。

「クレームから相互理解を」に寄せる想い

おやじ東京会長 脇山 幸之

今、至るところでコミュニケーションがうまくいかない、と嘆く人が多くなっています。

まず、ルールを守らない、あるいは意見を主張するときも度が過ぎてしまう。たとえば酔っ払って駅員に暴言を吐く、拳銃の果てに殴りかかるような犯罪まがいのトラブルも数多く発生しています。樹木の枝が塀を越えて伸びてきたとき、隣人同士で話し合わずに、役所に仲裁を申し出るなどなど。

何でもお金が尺度の主張がまかり通って、その結果何かあると「賠償しろよ」…。クレーム社会と一言で片付けられていますが、これまでと何が変わってしまったのでしょうか。

今まさに、私たちの社会が迷宮のようになって、そこから抜け出せない感じがあります。でもみんな気付いているのではないですか？ もう少し上手にコミュニケーションが取れば、大半の場合は解決できると。

本日この場で取り上げる問題も、ほとんどがちょっとしたすれ違いから始まっています。おやじ東京は、子どもの健やかな成長を願う立場でこの問題に取り組んでいます。そこでは、[子どもは一人では育たない、周りの子どもと一緒に育つのだ]ということに気付いて欲しいと思います。

子どもに関わる大人たちも、まず自分自身の足元の家庭や地域を大切にして、意思が十分通じ合える関係を築いていく必要があるのではないのでしょうか？

学校や地域社会で起こっている理不尽な要求を減らし、さらには発生防止のため、意思疎通がしやすい関係づくりを目指そうではありませんか。

本日、ここで話し合っていくことは、ささやかな試みですが、この活動を全国に向けて展開し、いつか私たちの社会に[生き生きとしたコミュニケーションの輪]を作り上げようではありませんか。

ギリシャ神話で、クレタ島のミノタウロスがいる迷宮に入ったテセウスが、アリアドネにもらった麻糸を頼りに無事に戻ったという話があります。出口の見えない社会の迷宮に必要な糸は何でしょうか？ 出口を見出し、より良い社会を築き始めるには、何が必要でしょうか？

学校からも・地域からも・怒声ではない、にこやかな声が聞こえてくる社会にたどりつくための糸を持っているのは、そう[あなた]です。